2014年
11月17日
月曜日

―平和の創造―

舟木　譲　教授（宗教哲学・キリスト教学）

15世紀から16世紀にかけて西ヨーロッパで起こった二つの「R」、すなわちルネサンスと宗教改革に象徴されるパラダイムの転換は、それまで宗教・世界・社会・人間等々の理解に大きな影響力を有していたローマ・カトリック教会のキリスト教への挑戦から始まり、これまで「当たり前」であった答えがそうではなくなるという大きな時代の変化の始まりであった。またそれは、人間が本来有する様々な可能性に改めて自由が与えられた時となった。

その後西ヨーロッパは、長年一つの組織によって与えられてきた価値観から「自由」となり、産業革命を経て資本主義経済を基調とする近代社会を形成し、同時に宗教から「自由」となる今日の世界の一つの枠組みが構築されていったと言いうる。

その後そうした社会へのアンチテーゼとしての「共産主義」が提唱されるが、ソビエト連邦の崩壊によって、再び「自由」と「合理性」を基調とする社会が世界に大きな影響力を及ぼし、今日に至っている。

しかし、「自由」と「合理性」を理性によって行使するはずの世界に紛争と戦争と飢餓が絶えたことはなく「平和」とは正反対の状況が継続中である。さらに近年「ボコ・ハラム」や「イスラム国」といった、曲解したイスラーム思想を実行に移す組織が誕生し、多くの人命がさらなる恐怖と危機にさらされるという状況にまで至っている。

こうした現実を直視する時、わたしたちはこれまで進めてきた近代化・産業化等々の中で見落としてきた様々な事柄に対して丁寧にまた早急に向き合う必要に迫られている事に改めて気づくべきであろう。

すなわち、私たちがこれまで「当たり前」に共有しており、誰しもが望んでいるというように考えていた「平和」が「幻想」であり、思想・信条・信仰・経済的立場等々によって異なるという現実への「気づき」が急務となっているということである。その背後には今日の経済的優位にある「世界」が無意識に許容してきた古代以来の「キリスト教」的世界観・人間観が存在していると言いうる。経済的ならびに軍事的な強者が容認しているそうした世界観を持たない人々が存在している、という「当たり前」の事実に気づくとき、「平和」という共通の何かが存在しているのではなく、「平和」は「創造」するものであるという結論に至るであろう。

異なる「世界観・価値観・経済観・人間観・思想・信条・信仰等々」の存在に向き合い、そこから互いの違いに軽重・優劣をつけることなく、互いの存在と尊厳を認め合える状態こそが真の「平和」な状態であるはずであり、その創造のために知恵を尽くし真の「理性」と「合理性」を駆使する不断の歩みが今こそ私達に求められていると言えよう。

「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。」（「マタイによる福音書」5：9）これは「山上の垂訓」と呼ばれるイエスの言葉の中の一節であるが、ここにも「平和」がどこかに存在している観念ではなく、現実化させるための行動が必要であることが示されている。憎悪と紛争が日常化している今日、真の「平和の創造」に向けて一人一人が積極的に参与するということに共に想いをいたしたい。■